

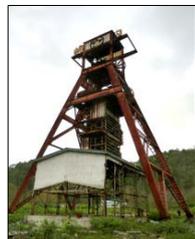
“炭鉱（ヤマ）の記憶”を地域資源に・・・

わが国の近代化を支えた空知（そらち）地域の“石炭”

明治時代、近代化により日本の風景は一変する。北海道では「農業」と「地下資源開発」を柱に本格的な開拓が始まり、北海道初の近代炭鉱として官営幌内炭鉱（三笠市幌内）が1879年に開鉱、その石炭を積出港である手宮（小樽市）へ運ぶため、日本で三番目の鉄道「幌内鉄道」が1882年に全通した。鉄道は、内陸部へ入植する人や資材を運び、内陸部から農産物を輸送した。1892年に岩見沢～室蘭間が開通、室蘭も石炭積出港となり、炭鉱会社による製鉄所も造られ鉄の街として発展した。1906年には鉄道の国有化により財閥系等の炭鉱会社が空知地域へ進出、山間部に巨大な都市機能を持つ炭鉱都市が出現した。急峻な谷間にも長屋型の炭鉱住宅が立ち並び、3交代の坑内作業は24時間“眠らない街”をつくった。1960年代前半には空知地域に100を超える炭鉱が操業し、地域人口80万人の内50万人が炭鉱地域に暮らし、繁華街、映画館等の娯楽施設や教育施設などが狭い谷間に建設された。

炭鉱産業が残したもの、“炭都”の風景

最新技術と膨大な投資が行われた炭鉱も、安い輸入炭、エネルギー革命による1962年の原油輸入自由化などで閉山に追い込まれる。空知地域では優良炭鉱に集約して生き残りを図ったが、1995年を最後に坑内掘りは姿を消した。炭鉱の整理統合、閉山は急激な人口減少を招き、炭鉱自治体の人口は2000年代に10万人を割り、栄華を誇った炭都は記憶の都市への道を歩むことになる。沢筋には巨大な炭鉱施設跡や無人の炭鉱住宅街、ズリ山（石炭採掘により掘り出された岩石等を積んだ山。ボタ山）が残された。強制労働等の歴史、財政困窮、残された廃墟風景から“負の遺産”とも称され、「炭鉱町＝厳しい、暗い過去の町」といったイメージが形成された。



北炭幌内炭鉱の立坑槽

「炭鉱（ヤマ）の記憶」を資源に

1998年に開始された北海道空知支庁（現 空知総合振興局）の独自事業が契機となり、市民による炭鉱遺産保存、活用の動きが各地で広がり始める。当初は悲惨な事故や閉山時の辛い思い出、終わった産業という意識から地域内でも否定的な評価も少なくなかったが、様々な活動や北海道遺産への選定（2001年）など、徐々に地域資源としても取り上げられ、認

識や価値観の変化が見られるようになった。赤平市では元炭鉱マンが中心となり住友赤平炭鉱の立坑槽や自走砕工場のガイドツアーを月1回開催し、美唄市では炭住街の旧栄小学校を彫刻家 安田侃氏の美術館「アルテピアッツァびばい」に再生した。当 NPO では「炭鉱の記憶」をキーワードに炭鉱遺産を舞台としたアートプロジェクトを開催している。昨年の住友赤平炭鉱跡（三笠市）での開催では延16日間に2,500名が来訪した。今年も8/23～10/13の土日祝に夕張清水沢、赤平と送電線の道で開催する。閉山後、炭鉱施設の多くは解体・撤去されたが、残った施設跡は都市コミュニティーや食文化、最先端技術など、現代にも繋がる英知を知る糸口となっている。北炭幌内炭鉱立坑は地下915mを繋ぐ超高速のエレベーターであり、住友赤平炭鉱の坑道延長は200kmを超えている。東京スカイツリーの高さ634m、青函トンネルの延長約58kmと比較してそのスケールの大きさに驚かされる。元炭鉱マンや地域の人々のガイドによりかつて存在していた風景を辿る産業遺産観光、産業システムやエネルギーについての学習、過酷な労働環境で“命を守り、生きる”ことをテーマとした教育プログラムも期待されている。



住友赤平炭鉱ガイドツアー

記憶の都市の未来とは

当 NPO は、平成25年度都市景観大賞の景観教育・普及啓発部門（財団法人 都市づくりパブリックデザインセンター主催）の優秀賞を頂いた。産業跡地も安全性を確保しながら活用することによって「地域の記憶を伝える資源」に成り得ることが認められ、各地に残る産業遺産の活用の可能性が明示されたのだと考えている。石炭という資源は、わが国の発展を支えたまさに「近代化の燃料」であった。そして、産炭地域においては都市を支えるエネルギーでもあった。石炭生産が止まるということは、その都市規模を維持できなくなることもあった。これからの都市を支えるエネルギーとは何であろうか？空知におけるひとつのエネルギーは、炭鉱マンや地域の人々の“誇りと思い”、そして“物”が失われても未来に繋がる“事”の継続力であろう。

空知の地下には未だに約80億tの石炭が眠っている。

（NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団 常務理事・事務局長 酒井裕司）